

St. Luke's International University Repository

Promoting Acquisition of Knowledge About the Basics of Diseases and Treatment : Initiatives from Active Learning to Unit Testing

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 文奈, 池田, 真紀子, 沢口, 恵, 青木, 裕見, 河田, 萌生, 前嶋, 亜希子, 牧野, 晃子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00000135

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



疾病・治療各論 知識習得の促進に向けて ～アクティブラーニングからチャレンジテストまで～

松本 文奈¹⁾ 池田真紀子¹⁾ 沢口 恵²⁾ 青木 裕見¹⁾
河田 萌生¹⁾ 前嶋亜希子³⁾ 牧野 晃子¹⁾

Promoting Acquisition of Knowledge About the Basics of Diseases and Treatment : Initiatives from Active Learning to Unit Testing

Ayana MATSUMOTO¹⁾ Makiko IKEDA¹⁾ Megumi SAWAGUCHI²⁾ Yumi AOKI¹⁾
Aki KAWADA¹⁾ Akiko MAEJIMA³⁾ Akiko MAKINO¹⁾

[Abstract]

In our university's curriculum, the course on the basics of diseases and treatment consists of 24 lectures (3 credits). The aim of this course is to provide a knowledge base concerning diseases and their diagnosis and treatment. Students learn about typical diseases and the methods of diagnosis and treatment based on the combined input of the relevant nursing faculties.

Since the curriculum was initiated in 2015, we have been discussing and exploring effective support that allows students to perform learning activities independently and proactively. During the 2015-2016 period, the nursing faculties identified various ideas with regard to providing support that were primarily designed to encourage students to prepare for lectures. In addition, the contents of the lectures were reorganized with the cooperation of the lecturers to identify the basic knowledge and key points crucial for passing the Japanese national nursing license examination. From 2017 onwards, we have also introduced a unit test to promote iterative learning, by utilizing questions from the past national license examinations. Supplementary lectures are also provided to clarify post-lecture questions and other issues raised by students when studying for examinations after the lecture series.

[Key words] Basics of disease and treatment, Basic education on nursing, Active learning, Undergraduate education

[要 旨]

本学カリキュラムにおいて疾病・治療各論は、3単位24回講義他で構成されている。学習目標は「疾病・診断・治療に関する知識基盤を構築すること」であり、成人・小児・精神・老年領域の担当看護教員が連携し、臨床医を講師に招聘して、代表的な疾患及び診断・治療法を学習する。

本科目では、本学〈カリキュラム2015〉開始当初である2015年度より、学生が主体的に学習に取り組むための効果的な支援について検討してきた。2015～2016年度は、担当看護教員で課題を抽出し、主に学生の事前学習を促進するための支援を試みた。更に看護師国家試験に向けて習得すべき基礎知識や重要ポイントが明確となるよう、講師と講義内容の再調整を行った。2017年度からは、学生の反復学習を促す試みとして、看護師国家試験過去問題を活用した〈チャレンジテスト〉の導入と補講を設けた。これらの取り

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science
2) 東京女子医科大学看護学部・Tokyo Women's Medical University School of Nursing
3) 聖路加国際病院看護部・St. Luke's International Hospital, Department of Nursing

組みから学生の主体的な学習を促進するための科目運営が確立されつつあるが、学生の学習習慣作りとしての課題も確認され、更なる学習環境強化に向けた今後の方向性を得た。

〔キーワード〕 疾病と治療論, 看護基礎教育, アクティブラーニング, 学部教育

I. はじめに

本学カリキュラムにおいて現在、疾病・治療各論は、保健師助産師看護師学校養成指定規則における専門基礎分野に位置付けられる科目として、3単位24回講義他で構成されている（前カリキュラムでは3単位・28回講義で構成）。最新の知見を持つ臨床現役医師複数名を講師に迎え、現在4年制コース2年生と2年制コース（学士編入）1年生に対し前期に合同で開講し、約130名の学生が一堂に学ぶ。学習目標は「疾病・診断・治療に関する知識基盤を構築すること」であり、成人・小児・老年に特有の疾患と精神分野における代表的な疾患について、診断・治療法を学習する。本学において本科目は、成人領域、小児領域、精神領域及び老年領域の看護教員が協働し運営しており、取り纏めとしての科目責任は成人領域の教員が担当してきたが、2019年度から輪番制での担当となった。

疾病・治療各論にあたる科目について、科目責任は講義を行う医師が担う大学が多い中、本学では基礎医学を教授すると同時に、看護学教育の基盤として必要な基礎医学とは何か、また基礎医学の知識をいかに看護実践で活用していくか等、看護の視点からの基礎医学を学生に教育することも重要視し、看護教員が伝統的に講義全般に関わっている。

本科目で教授する教育内容は多領域に渡り、幅広い。大学教育において課題解決型の能動的学修（アクティブラーニング）が推進される中¹⁾、現在の講義数で学生が知識を習得するためには、学習者の能動的な学習方法を組み入れた科目運営の開発を行う必要があった。本稿では、学生の効果的な学習を支援するための、2015年度から現在までの取り組みについて報告する。

II. 2015～2016年度：学生の効果的な学習を支援するための試み

1. 関連領域の担当看護教員との課題共有及び運営方針の検討

本科目の講義内容は、成人領域、小児領域、精神領域及び老年領域の基礎医学に関するものである。各領域の講義数は関連領域の担当看護教員で検討し決定する。また、各領域の担当看護教員は、領域で実施する講義の講師選定と講義内容調整、更に講義資料と単位認定試験の

ための試験問題の責任を担う。

前カリキュラムにおいて共有されている課題として、1回の講義内容が多く時間内に理解しきれないこと、講師の専門性の高さゆえに知的好奇心は深まるものの基礎的に重要な学習ポイントがつかみにくいこと、単位認定試験に向けて復習をする際に何から学習していいかわからないという学生の勉強方法の迷い等が挙げられていた。看護学生にとっての目的の1つである看護師国家試験合格に向けた学習との乖離も課題と考えられていた。こうした課題を担当看護教員で共有し、今後の方針として以下の3点を決定した。

- 1) 学生が事前学習しやすい学習環境を整えること
- 2) 看護師国家試験に向けて習得すべき基礎知識の明確化
- 3) 疾病・治療に関する知的好奇心を刺激し、今後学び続けたいと思う意識を育むこと

2. 講義形式の方向性とアクティブラーニングの推進

本科目の講師は最新の知見を持つ臨床現役医師としてのことから、例年16名～20名程度の講師を招聘しているオムニバス形式での講義形態となっている（表1）。講義形式は講師の個性から多様であり、学生にとってはユニークな科目という評判もある。講師自身の講義形式に本科目の運営方針を融合していただくよう、それぞれの講師に対し、以下のように調整し、科目全体の講義形式の方向性を整えていった。

1) 学生が事前学習しやすい学習環境を整えるために

これまで講義資料は、講義当日に印刷したレジユメを配付していた。これには講師の資料準備が直前となっている現状も背景にあった。折に、学内でのWifi環境が充実し、クラウド型の教育支援サービス《manaba》が整えられたことから、学生に事前に講義資料を配信することが可能となった。学生の予習時間を確保するため、講師への講義資料作成を1週間前（遅くとも4日前頃）迄にと協力を依頼し、manabaを通じて事前配信することを試みた。成人領域、小児領域は指定教科書を提示し、講師は指定教科書を基に講義を進めている^{2, 3)}。学生へは、当該講義が指定教科書のどの部分を教授する予定なのか、事前に教科書の範囲を提示し、事前学習しておくことも併せて促した。

学生には、十分な予習によって講義時の理解が深まる

表1 2017年度 疾病・治療各論講義スケジュールの例

1	4月14日(金)	④限：14：20 -15：50	脳神経系①	聖路加国際病院 救急部	部長	石松 伸一	脳神経系に関する病態生理・診断および、今日の治療 ①	
2	14日(金)	⑤限：16：00 -17：30	脳神経系②	聖路加国際病院 救急部	部長	石松 伸一	脳神経系に関する病態生理・診断および、今日の治療 ②	
3	21日(金)	④限：14：20 -15：50	がん①	聖路加国際病院 腫瘍内科	部長	山内 照夫	がん(乳がん、子宮がんなど)に関する病態生理・診 断および、今日の治療	
4	21日(金)	⑤限：16：00 -17：30	がん② 血液疾患	聖路加国際病院 腫瘍内科	部長	山内 照夫	がん(化学療法、放射線療法、免疫療法)に関する病 態生理・診断および、今日の治療 血液疾患に関する病態生理・診断および、今日の治療	
5	28日(金)	④限：14：20 -15：50	消化器系： 上部消化管	聖路加国際病院 救急部	専攻医	堀江 勝博	消化器系(上部消化管)に関する病態生理・診断およ び、今日の治療	
6	28日(金)	⑤限：16：00 -17：30	消化器系： 下部消化管 (肝胆膵)	聖路加国際病院 救急部	専攻医	石川 陽平	消化器系(下部消化管・肝胆膵)に関する病態生理・ 診断および、今日の治療	
7	5月12日(金)	④限：14：20 -15：50	呼吸器系①	聖路加国際病院 救急部	医長	大谷 典生	呼吸器系に関する病態生理・診断および、今日の治療 ①	
8	12日(金)	⑤限：16：00 -17：30	呼吸器系②	聖路加国際病院 救急部	医長	大谷 典生	呼吸器系に関する病態生理・診断および、今日の治療 ②	
9	19日(金)	④限：14：20 -15：50	小児①	聖路加国際病院 小児総合医療センター	小児科医長	草川 功	小児の主な疾患と診断・治療1	
10	19日(金)	⑤限：16：00 -17：30	小児②	横須賀市 療育相談センター	所長	広瀬 宏之	小児の主な疾患と診断・治療2	
11	26日(金)	④限：14：20 -15：50	小児③	聖路加国際病院 小児総合医療センター	小児科医長	草川 功	小児の主な疾患と診断・治療3	
12	26日(金)	⑤限：16：00 -17：30	小児④	聖路加国際病院 小児総合医療センター	小児科医長	草川 功	小児の主な疾患と診断・治療4	
13	6月2日(金)	④限：14：20 -15：50	腎泌尿器系 ①	聖路加国際病院 救急部	専攻医	遠矢 希	腎泌尿器系に関する病態生理・診断および、今日の治 療①	
14	2日(金)	⑤限：16：00 -17：30	腎泌尿器系 ②	聖路加国際病院 救急部	専攻医	遠矢 希	腎泌尿器系に関する病態生理・診断および、今日の治 療②	
15	9日(金)	④限：14：20 -15：50	循環器系①	聖路加国際病院 救急部	専攻医	清水 真人	循環器系に関する病態生理・診断および、今日の治療 ①	
16	9日(金)	⑤限：16：00 -17：30	循環器系②	聖路加国際病院 救急部	専攻医	清水 真人	循環器系に関する病態生理・診断および、今日の治療 ②	
17	16日(金)	④限：14：20 -15：50	運動器系	聖路加国際病院 救急部	専攻医	鈴木 皓佳	運動器系に関する病態生理・診断および、今日の治療	
18	16日(金)	⑤限：16：00 -17：30	自己免疫疾 患	聖路加国際病院 救急部	専攻医	石川 陽平	アレルギー・自己免疫疾患に関する病態生理・診断お よび、今日の治療	
19	23日(金)	④限：14：20 -15：50	内分泌代謝 疾患	聖路加国際病院 救急部	専攻医	磯川修太郎	内分泌代謝疾患に関する病態生理・診断および、今日 の治療	
20	23日(金)	⑤限：16：00 -17：30	精神①	聖路加国際病院 リエゾンセンター	精神科部長	池田 真人	精神の主な疾患と診断・治療1	
21	30日(金)	④限：14：20 -15：50	精神②	聖路加国際病院 リエゾンセンター	精神科部長	落合 尚美	精神の主な疾患と診断・治療2	
22	30日(金)	⑤限：16：00 -17：30	精神③	聖路加国際病院 リエゾンセンター	精神科副医長	三浦 裕介	精神の主な疾患と診断・治療3	
	7月7日(金)	④限：14：20 -15：50	予 備					
23	7月7日(金)	⑤限：16：00 -17：30	高齢者	梶原診療所 在宅サポートセンター	在宅サポート センター長	平原佐斗司	高齢者の主な疾患の病態生理とその診断・治療	

こと、更に、疑問点は講義中もしくは講義終了時に講師へ質問し、その日のうちに疑問を解決するような姿勢で講義に臨むことの重要性を指導し、こうした学習習慣の確立から学生のアクティブラーニングを推進した。

2) 看護師国家試験に向けて習得すべき基礎知識の明確化に向けて

講師に向けて、講義依頼時に看護師国家試験の出題基準の概要について説明し、当該講義において求められる

看護基礎教育の重要ポイントを改めて確認した。医師の理解を得るため、看護師国家試験の概要や過去問題を提示する等、講師ごとの工夫や対応をとった。これにより、疾病や治療に関する最新の幅広い基礎医学において、看護基礎教育として重要となる観点を、講師と看護教員で共有し、講義における教授内容の選定や強調すべきポイントについて、改めて擦る合わせることができた。

3) 疾病・治療に関する知的好奇心を刺激し、今後学び続けたいと思う意識を育むこと

本科目の開講は4か月という期間で実施される。短時間で完遂できる知識量ではないことは学生も実感するところである。講義では代表的な疾病・診断・治療に関して体系的に教授されるが、学生によっては概要を理解する十分な期間とはいえない。本科目は専門基礎分野の科目としては初期に開講されているだけに、専門用語の1つ1つを理解することに時間を要する学生も多く、苦手意識を抱く学生も少なくなかった。そうした時期の学生への講義であることも踏まえ、講師には、疾病・治療に関する知的好奇心を刺激し、今後学び続けたいと思う意識を育むことも重要視していることを伝えた。そのうえで、当該講義において、「治療や合併症予防にあたっての看護上のポイント」や「よりよい医療提供のために医師から看護師へ期待すること」を講義に組み込んでもらうよう依頼した。

看護学生がこれから専門職として自律していくためには、疾病や治療に関する知識を主体的に学び続けていく必要がある。その際医師との対等なパートナーシップは欠かせない。学生の段階で、臨床医が期待する看護師の専門性を伝えてもらうことで、看護職として学び続けようとする姿勢を学ぶ機会につなげることを狙った。

3. 2015～2016年度の取り組みからの課題

2015～2016年度は、前述の1.～2.を中心とした学習支援を試みた。事前に講義資料を配信するために、講師には早めに資料を仕上げる負担を依頼することとなったが、これによる講義内容の質的低下はなく、科目運営は円滑に進められた。事前学習への学生の取り組みは個別性があったが、十分な事前学習をしてきた学生が講義終了後に積極的に講師に質問に行く姿を見て、刺激を受ける学生も見受けられるようになった。併せて講義終了後に事前学習を中心としたアクティブラーニングの意義を看護教員が学生に投げかけることで、学生の意識も徐々に変化していく印象を受けた。

2015年度は、アクティブラーニングの一環として、ワールドカフェ形式でのグループワークを試みた。循環器疾患の講義を2コマ設け、1回目の講義において、講師が基礎的知識を教授する(図1)。その後、学生がそれぞれ指定された疾患をグループで担当し詳細に学習を深め(図2)、1週間後に設定した2回目の講義で、各学生がその疾患の病態・治療法を発表する(図3)というものである。講師と担当看護教員は、その1週間をサポート期間とし、サポートを希望する学生に対して学習法と発表準備ができるような関わりを行った(10グループ中4グループからの指導希望があり、対応した)。学生からは「楽しく学べた」「医師が勉強に付き合ってくれてありがたかつ

た」という意見もあったが、「他の科目の宿題も多い中グループワークを行う時間があまりとれなかった」「調べるのに時間がかかった」という意見も多かった。本科目が開講される時期は、グループ学習の経験が浅い時期でもある。学生は提示された課題に取り組む意欲はあるが、本科目のように専門的書籍から知識をまとめて発表する学習法は、グループで取り組むには時期尚早である可能性があった。本科目においては、個々の学生が自身のタイミングで意欲的に取り組める学習環境を整える方が、学習効果は高いのではないかと考えられた。

また、昨今、パソコンやタブレットでの学習を好む学生も多く、講義資料の解剖図などは、電子媒体で拡大した方が学びやすいという意見も散見した。意欲的な学生は、講義資料に事前に学習した内容をコメント入力したり、講義を聴きながら不明瞭な事項はネットで調べられるといった方法もとっており、学生自身が発想した効果的な学習方法も多く見受けられた。こうした方策を広く容認することは学習効果が高いと判断し、学生が事前学習しやすい環境作りの一環として、講義時に電子媒体の持ち込みや活用を積極的に導入した。

講師によっては看護師国家試験過去問題の試験形式や傾向を調べ、講義の中で楽しいクイズ形式として出題するなど、講義一辺倒にならない工夫として活用することもあった。この試みに学生の反応は、「とても解答できな

課題

- 担当する疾患について、A4用紙にまとめる
 - 疾患概念・病態生理(どこがやられてどうなる?)
 - 疫学情報(どんな人に多い?)
 - 症状(どんな自覚症状や身体所見がある?)
 - 診断(どんな検査を行う?)
 - 治療(どんな治療を行う?)
 - その他(予後などは?)
 - 次回(4月21日)発表(発表6分+質疑応答2分)
 - 別の10グループに分かれて、全員が発表する
- 配布問題が解けるように
• 事前提出して添削可能

図1 ワールドカフェ形式の講義資料①
(2015年度講義資料より)

担当決め

- a. 心肺停止
- b. 虚血性心疾患(急性/陳旧性心筋梗塞,狭心症)
- c. 先天性心疾患
(心房/心室中隔欠損,動脈管開存,ファロー四徴症,大血管転位)
- d. 後天性弁膜症(僧帽弁/大動脈弁の狭窄症/逆流症)
- e. 特発性心筋症(拡張型/肥大型心筋症)
- f. 感染性心内膜炎,心筋炎
- g. 不整脈(頻脈性不整脈/徐脈性不整脈)
- h. うっ血性心不全(右/左心不全)
- i. 高血圧症・動脈硬化
- j. 大動脈瘤,大動脈解離,大動脈炎症候群
- k. 閉塞性動脈硬化症,バージャー病
- l. 静脈瘤,血栓性静脈炎,リンパ管炎

余った2個は本日例示

図2 ワールドカフェ形式の講義資料②
(2015年度講義資料より)

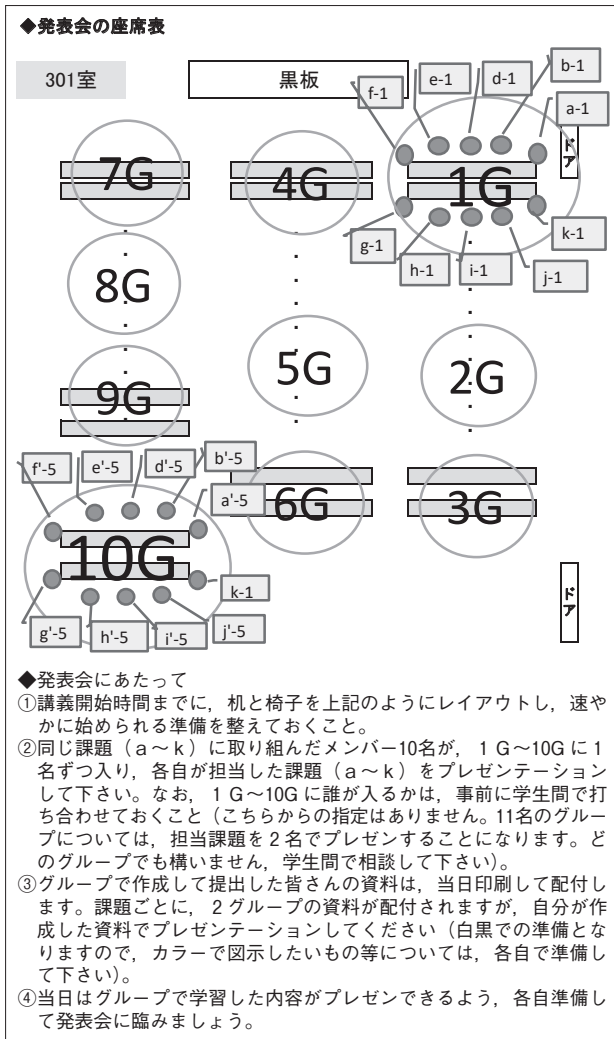


図3 ワールドカフェ形式の講義資料③
(2015年度講義資料より)

い、終講試験がとても不安」というような、今正解できないことへの不安や焦りの声も散見したが、「看護師国家試験ではあんな知識が問われるのだと、今学習していることの意味がわかった」「国家試験のイメージがついた」という肯定的なものも多く聞かれた。

こうした取り組みを通じて、次年度からは「復習しやすい学習環境づくり」を目指し、科目運営を進めることとなった。

Ⅲ. 2017～2018年度：学生の反復学習を促す学習環境への試み

1. 看護師国家試験過去問題を活用したチャレンジテスト

これまで講師の一部が実施していた講義内での看護師国家試験過去問題の活用について、成人・小児・精神・老年領域すべての講義で、「チャレンジテスト」（*学生への名称は「やってみよう！チャレンジテスト」）として実施することとした（図4）。これは、過去問題そのもの

の出題に限るものではなく、選択肢を○×でクイズ形式としたり、講義内の区切り毎に行うなど、出題やタイミングは講師に任せ、5問、5分程度で実施している。また、チャレンジテストの正誤は成績につながるものではない設定とし、回答に当たっては、学生同士での相談や資料の確認は行ってよいことと（むしろ資料のどこを見れば回答できるか自身で確認することを推奨）している。また、講師へは、可能であれば回答提示後にその解説を行うことも依頼した。チャレンジテストと回答、解説は講義終了後、マナバにて学生に配信し、手元資料として残すことで、自身のタイミングで復習に活用できるようにした。

2. 双方向的学習を促進するための補講の導入

意欲的な学生については、これまでも講義終了後に自身の疑問を解決するために講師のもとに行き、自身の学びを深めていた。そうした学生は毎年一定数存在するが、講義内に積極的に挙手をして質問するという学生は例年殆どいない。自身で学びを深めようとする意欲的な学生の学習態度を他の学生にも共有してもらうこと、また、終講試験に向けた復習を早めに始めてもらうきっかけを作るために、2017年度から補講を導入した。対応講師の勤務状況や時間割の制約から、可能な補講は1コマである。補講が復習のきっかけとなるよう、事前に学生から、「終講試験に向けた学習を始め、質問しておきたいこと」「もう一度解説してほしいチャレンジテスト」について、質問事項を募っている。また、講義後の学生のレスポンスカード：「本日の講義への感想、質問、その他」に書かれていた質問についても、補講での解説対象とした。

学生の学習意欲を高めるため、補講は講師による一方的に解説を行う時間ではなく、学生との双方向的な質疑応答の時間としている。事前質問によっては、講師は更に分かりやすい解説となるよう、実際の医療器具を持参

気管支走行を意識した体位ドレナージ

93 Aさんは、胸部エックス線写真で右中下肺野の浸潤影が認められ、膿性の痰が吸引されている。

このときの体位ドレナージで最も効果的なのはどれか。

1. 右30°側臥位
2. 左30°側臥位
3. 右前傾側臥位
4. 左前傾側臥位
5. 腹臥位

右側臥位＝右側を向く側臥位＝右(下)側臥位
左側臥位＝左側を向く側臥位＝左(下)側臥位

St. Luke's International Hospital
2016年 A-93 4

図4 やってみよう！チャレンジテストの例
(2017年度講義資料より)

するなどの工夫も取り入れている。学生にとって、ざっくばらんに質疑出来る、医学的探求心が育まれる時間となっている様子であり、学生からは「こういう補講は続けてほしい」「もっと勉強頑張ります」といったコメントが返ってきている。

3. 2017～2018年度の取り組みからの課題

学生が本科目の知識を効果的に復習するための取り組みとして、2017年度からは、チャレンジテストと補講を導入した。

オムニバス形式で講義を行う本科目において、全領域の講師が講義内で知識確認のためにチャレンジテストを実施するという方法は、講師にとっては講義形式として苦慮することもあったことが伺えたが、学生からのレスポンスカードでは、「講義ごとに病気の種類が違い、覚えることも多くて大変だが、チャレンジテストでの知識確認がまとめのようになっていた」「どの講義でも一生懸命聞いていたつもりだったが、最後のチャレンジテストで改めて、どこが今日の勉強のポイントだったかがわかった」等の意見が聞かれ、学生にとっては教授方法の統一感があったという点で好評な印象であった。

また、学生にチャレンジテストの有用・無用をアンケートしたところ、ほぼ全員がチャレンジテストは有用であったと回答した。「チャレンジテスト、全問解けました!」「チャレンジテストが解けるように頑張って復習します」「授業のポイントがわかった」等、事前学習を行ってきたからこそ講義の内容が理解しやすくなり、その知識を使って今、このチャレンジテストが解けた・解けなかったという感想も寄せられており、このことからチャレンジテストが学生の事前学習や復習のきっかけになっている様子が推察された。

また、チャレンジテストを看護師国家試験をベースとしたことについて、学生から、自身の学習のゴールを意識できた様子が聞かれ、看護師国家試験過去問題を活用したチャレンジテストは、今後も継続して取り組む意義が確認できた。一方で、終講試験に関する質問として、学生から「チャレンジテストだけ勉強していれば終講試験は合格できますか?」といった質問も寄せられた。チャレンジテストの問題が終講試験に出るわけではない旨を再三説明していたが、学生によってはチャレンジテストしか勉強しないといった学習法につながる可能性も懸念され、そうした学習習慣とならないような事前説明での強調や運用が今後の課題と考えられた。

補講の有用・無用について学生へアンケートしたところ、補講があることで学習効果がありそうだと答えた学生は8割程度であった。自由記載では、「何を質問していたかわからなかったが、他の学生の質問を聞いて自分がわかっていないことがわかってよかった」といった意見

が多く、学生同士の学習の共有として良い機会となりえることが確認できた。

IV. 疾病・治療各論で習得した知識の活用を意識した、各看護専門科目での教育に向けて

本科目を担当する看護教員は、本科目終了後から始まる各領域の看護専門科目において、疾病・治療法の学習を積み重ねていくことを重要視している。

本科目で習得した知識を、学生が活用できたと実感するタイミングの1つに、患者への看護活動に取り組む時が挙げられる。例えば成人看護学Ⅱでの演習、成人看護学実習(慢性期)での実習において、患者の全体像を分析する時である。演習・実習で立案する看護活動において、本科目で習得した知識の再学習を促しながら患者の病態や全体像を捉え分析し、健康問題を抽出する。また、患者に行われている治療法の特徴から、生活への影響や看護活動の根拠を考察することも課題とする。学生は臨地実習に際し、様々な資料を参考し持参して臨むが、疾病治療各論で配付された講義資料を持参し学習を深めようとする様子も多く見受けられ、基礎医学の知識を看護活動に活用する実践に繋がっている感触を得ている。

本科目の運営に際し看護教員は、それぞれの看護専門領域でより必要となる疾病・治療法を基に、構成や講義内容について意見を出し合い検討を重ねている。今後も臨床医からのオムニバス形式での講義が継続する場合は、こうした各領域間の看護教員の丁寧な連携が、引き続き本科目の重要な要素であると考えられる。

V. まとめ

本稿では、疾病・治療各論において、学生が主体的に学習に取り組むための効果的な支援について、アクティブラーニング促進を目指した、2015年度から現在までの試みを報告した。

今後はこれまでの科目運営を活かしながら、学習効果を確認する機会も視野に入れ、次年度以降の科目運営を検討したい。

引用文献

- 1) 文部科学省. 大学教育部会の審議のまとめについて. 平成24年度 [Internet]. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1318247.htm [参照 2019-10-11]
- 2) 松田暉他編. 看護学テキストシリーズ NICE: 疾病と治療 I, II, III, IV. 東京: 南江堂; 2010.
- 3) 白木和夫, 高田哲編. ナースとコメディカルのための小児科学. 第5版. 東京: 日本小児医事出版社; 2016.